

# テレビ会議システムを利用した日豪小学校間の 国際交流活動普及のためのパイロット研究

辻 伸 幸

# テレビ会議システムを利用した日豪小学校間の国際交流活動 普及のためのパイロット研究

## A pilot study of International Exchange Learning through the videophone communication in elementary schools in Japan and Australia in order to make the learning in common

辻 伸幸

Nobuyuki TSUJI

### 要約

本研究は、小学校英語教育が大きく変革しつつある中、英語を使ってコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成するために国際交流活動の普及を目指すパイロット研究である。特に、日豪間の小学校をテレビ会議システム(Skype)で接続し国際交流活動を実施した事例に焦点を当てた。児童にとってどのような内容が適切か、教員や児童にどのような専門的支援が必要かを明らかにした。

実施された国際交流活動では英語による自己紹介や質問、発表を行い、児童の達成感と満足感が高かった。また、英語を使う必然性が生まれたので必要となる英語の語彙や表現を主体的に練習することができ熟達度も高かった。教師や児童に対する専門的支援では、「対面授業の支援」「テレビ会議システム(Skype) を使ったシミュレーション授業支援」「オーストラリア側の日本語教員との事前打ち合わせ及び調整の支援」が有効であった。

今後、持続可能な国際交流活動を普及するために、さらなる内容や方法の充実、専門的な支援の解明が求められる。また、小学校新学習指導要領外国語科に合致した学習内容と教育方法を開発することも必用である。さらには、外国語科の授業と国際交流活動を連携させて学ぶ中で英語の「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の評価についても内容や方法を確立していかなければならない。

### 1. はじめに

2020 年度から小学校外国語教育は、質的にも量的にも拡充されることとなった。

量的には高学年で外国語が教科化され年間 70 単位時間、中学年で外国語活動として年間 35 単位時間の授業が実施される。現状の小学校外国語教育の総授業時数である 70 単位時間から 210 単位時間へと 3 倍になる。質的には高学年において今まで踏み込むことができなかった聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの基礎的な技能の習得が含まれている。また、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて

外国語で自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力の育成や他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことも目標としている。

教科化により教科書が発刊される。教師にとって教科書や教科書対応の指導書は、指導の上で大きな指針と安心を与えてくれる。しかし、指導書を参考にした教科書を教え込む学習スタイルは容易であるが、児童の主体的、対話的で深い学びを阻害したり学習意欲を減じたりする危険性が極めて高い。そうならないために、教科書を使いつつ小学校外国語科目標

の達成につながる必然性のあるコミュニケーション場面を設定することが必要である。その有力な手段として海外の同年代児童との国際交流活動がある。

筆者は、小学校教員時に10年以上日豪小学校間での国際交流活動を実践・研究してきた。公開授業、研究実践発表、論文、図書などでその意義や方法について情報を発信してきたが国際交流活動が他の小学校に波及することは皆無であった。原因として、小学校教員が挑戦してみようと考えても、未経験のことが多すぎて取り組めないことが推測される。また、必要な時に専門的な立場から支援できる者がいないことも考えられる。

全国で先進的に国際交流活動を実践している小学校が多数存在するが、散在しており、どのように実践されているのかを集約した研究は見当たらない。

さらに、新小学校学習指導要領外国語科の目標や内容に合致した国際交流活動カリキュラム開発もこれからである。

以上のような学術的背景を踏まえ、どのような国際交流活動カリキュラムを開発し提示すれば新小学校学習指導要領外国語科の目標を達成できるのか、また、どのような支援を整えれば、導入しようとする学校が増えていくのかを最終的な問いとしたい。本研究は、その方向性を探るための予備調査を含むパイロット研究である。

本研究では、和歌山県紀の川市立 A 小学校とオーストラリア・ビクトリア州立 B 小学校において Skype を利用した日豪小学校間の国際交流活動の事例に焦点を当てる。本事例での国際交流活動の内容を検証すると共に一連の流れで、担任や児童たちにとってどのような支援が必要なのかを論証していきたい。

## 2. なぜ、日豪小学校間の国際交流活動なのか

筆者が日豪小学校間の国際交流活動の実践・研究する中で明らかにしてきた利点を挙げると、以下の5つが考えられる。

- ①オーストラリアは、移民を多く受け入れてきた多文化国家であり、国民の相互理解を深めるため小学校から多言語教育を実施している。また、アジア諸国との経済的な結びつきを強めるためにアジアの言語を学ばせようとしている。その中でも日本語を導入している小学校は多く存在している。双方の立場から考えると、お互いの国語が学習言語となり学んだり、伝えあったりする上で互恵性がある。
- ②双方の文化を学ぶことが可能で語学学習とともに異文

化理解教育が深まり、興味関心を高めて国際交流活動や外国語教育の実施が可能である。

- ②両国の時差が少なく、授業時間中にインターネットを活用した Skype を使うことで同期型国際交流活動が行える。
- ④両国の小学校での授業日の重なりは、英語を母語とする他の国に比べて多い。
- ⑤オーストラリア側は日本語の教員であり、日本の小学校教員とコミュニケーションを取ることがより容易である。また、日本人が現地の大学で教員資格を取得後、日本語専科教員として勤めていることもあるため、そのような学校との国際交流活動は、よりスムーズにできる。

筆者は、2018年8月にビクトリア州のモナッシュ大学日本語教育メルボルンセンターや州立小学校を訪問し、各学校のホームページから国際交流活動の情報収集が可能なることを知った。帰国後、ヴィクトリア州教育庁発行の *Languages Provision in Victorian Government Schools, 2017* で報告された日本語教育を実施している州立小学校の全ホームページを調査した。その結果、日本の小学校との国際交流活動の内容を発信している学校が、少なくとも207校中30校あることが明らかになった。このようにビクトリア州だけでも日本語を教えている小学校の14パーセントの学校が国際交流活動を行っていることから特殊なケースでないことが分かる。

## 3. これまでの国際交流活動実践と研究

筆者は、過去10年以上にわたり継続的に国際交流活動を必然的なコミュニケーション活動の一つとして位置づけ、外国語教育や国際理解教育にどのような利点があるか研究と教育実践を行ってきた。それらから得られた知見が以下である。

- ①高学年で英語活動を国際交流活動と調べ学習に連携させて授業を構成すれば高学年の発達段階に合致し、英語嫌いをつくらないことが明らかになった。(辻, 2009a)。
- ②中学年で英語活動と関連付けて国際交流活動(海外の小学校へビデオレターを送るプロジェクト)を行えば、児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が高まることを明らかにした(辻, 2009b)。
- ③国際交流活動の相手校の探し方を示した後、時系列でどのように展開していくか提案した。児童が海外の学校に自分たちのことを伝え、相手からの発表で交流先を知ることを成し遂げるプロジェクト型にすると児童が主体的に取り組め

ることが明らかになった(辻, 2009c)。

- ④小学校 3 年生においても日豪の小学校間で英語を使ったビデオレターで自分たちのことについて伝えるプロジェクトを立ち上げ、国際交流活動を実施したところ主体的な学習につながる事が分かった(辻, 2009d)。
- ⑤6 年生で多くの外国人と英語を使って伝え合う国際交流活動とそこで使用する英語に慣れ親しむ英語活動の関連学習を経験した児童の追跡調査を実施した。結果、英語活動と国際交流活動を密接に関連させて学習してきた児童の集団の方は、小学校での学習経験が中学校の授業に役立っているとする傾向が強いことが明らかになった(辻, 2011)。
- ⑥日豪の小学校間の高学年において簡単な英語を使った自己紹介を行う国際交流活動を行った。事前と事後に使用する英語の単語と会話文のリスニングテストを実施した。対応のあるt検定の結果、英語を使う必然性を高めた国際交流活動は、語彙や表現の定着を促すことを実証した(辻, 2016)。

#### 4. 先行研究

筆者のみならず小学校英語教育と国際交流活動を連動させて教育の向上を目指した研究が数多くなされている。ここでは、本論文が焦点に当てている Skype など ICT を利用した研究について示すことにする。

石毛(2018)は、日本と台湾の小学校を Skype でつなぎ児童が英語でのやり取りやノンバーバルな表現を活用しながら即時的な国際交流活動を行いコミュニケーションできる喜びを体感できたと報告している。

富島(2016)は、日本の小学校とオーストラリアの中高等学校を Skype でつなぎ非同期型ではあるがスライドショーを用いて英語による国際交流活動を実施した。外国語で話す必然性が生まれ児童らがより相手を意識したコミュニケーションへの意欲を高めることができたとして報告している。

米田、西村、宮浦(2018)は、日豪の小学校を Skype でつなぎ児童の英語力で扱いやすいテーマと言語表現、クイズなどの対話形式を選んだ交流授業を行った。その結果、英語のやり取り能力の向上につながる可能性があることを明らかにした。

どの研究も国際交流活動が英語教育の質を高めていることを実証する研究である。これからは、いかに国際交流活動の内容や方法を整え普及していく段階にきていると考えられる。

#### 5. 和歌山県紀の川市立 A 小学校

和歌山県紀の川市を流れる紀の川の中流域南岸の丘陵地に位置し、校区は緑あふれる豊かな自然と人情に恵まれた準農村地域である。2011 年度には、児童数も 105 人あったが、人口減少により徐々に児童数も減少しつつある。2018 年度の児童数は、40 人である。

教育に対して協力的な安定した地域である。児童たちは従順で落ち着いて日々の教育を受けることができている。紀の川市の中でも最も規模が小さい小学校の一つであり、多様な人との関りが少ないことが課題である。この課題に対応することからも今回の日豪小学校間の国際交流活動への期待は高かった。

Skype を利用するための ICT 環境は恵まれている。高速のインターネット回線が利用できるコンピュータ教室があり、電子黒板、ウェブカメラ、ウェブマイクも完備されている。これまでに、和歌山市内の小学校と Skype を利用した交流学习を行った経験があるが、海外の小学校との交流経験はない。

今回、国際交流活動を実施した学級は、5 年生 10 人、6 年生 7 人の計 17 人の複式学級である。担任は 30 歳代の男性教員である。

現学習指導要領に沿って行われている外国語活動は、5 年生で非常勤講師と ALT とのチームティーチングである。6 年生では担任と ALT とのチームティーチングである。

#### 6. オーストラリア・ビクトリア州立 B 小学校

ビクトリア州の州都メルボルンの南東に位置するクレイトンにある。典型的なオーストラリアの大都市近郊の町である。小学校から徒歩 10 分の所に世界的に有名なモナッシュ大学がある。留学生も積極的に受け入れている大学である。

全校児童 340 名の中規模校である。大学が隣接するグローバルな環境から在籍児童は、多様な文化、宗教的背景をもっている。従って、この多様性を認め、学び合い深い学びに結び付けようとしている。長年、日本語はプリスクールから 6 年生まで日本語専科教員が週に 1 時間単位指導している。

今回、国際交流活動を実施した学級は、3・4 年生の複式学級である。日本のように児童数が少ないために法律・規則上複式学級になるのとは違いオーストラリアでは、同一学年の児童で学級を編成せずに隣接学年で学級を編成している学校が多く存在する。B 小学校もその一つである。

## 7. 実施された国際交流活動

2018年11月26日月曜日の日本時刻12時45分(ビクトリア州時刻13時45分)にSkypeを双方で接続して実施した。進行は、日本側で担任が、オーストラリア側で日本語専科教員が務めた。

活動は、以下の順序で行われた。

- ①オーストラリア側からビデオ接続の呼び出しで、日本の教員が接続して、お互いの児童全員が映し出される。日本側からは、“Hello.”や“Hi.”、オーストラリア側からは、「こんにちは。」と口々に声に出し、笑顔で対面した。
- ②日本側の児童一人一人から、英語で自己紹介をする。画面に上半身が映るようにして、絵を用いた自己紹介ポスターを相手に見せながら行った。自己紹介で用いられた英語の例は次のようなものである。  
“ Hello. My name is Hikari. I like K-pop music. I like dogs. I like Arts & Crafts. I like basketball. Thank you.”  
各々の自己紹介が終わるたびにオーストラリア側は“ Thank you.”と言って拍手で応答していた。
- ③オーストラリア側の児童一人一人から、日本語で自己紹介があった。自己紹介で用いられた日本語の例は次のようなものである。「こんにちは。ぼくの名前はタイラーです。10歳です。ワンピース(アニメの題名)が好きです。コアラが好きです。各々の自己紹介が終わるたびに日本側は「ありがとう。」と言って拍手で応答していた。(写真1)
- ④日本側の児童がオーストラリア側の児童に英語または日本語で質問をした(写真2)。事前に質問をしたいと希望した児童3組が行った。質問で用いられた英語の例は“ I like K-pop music. Do you like K-pop music?”のようなものである。この質問では、児童が好きなK-popの曲をCDでかけて聞かせる工夫をしていた。
- ⑤日本側の児童6人が、運動会で取り組んだ組体操の演技を披露した。演技は、当日に使用されたバックミュージックを流して、担任の笛の合図で2種目行った。オーストラリアの学校では、組体操がないので、それを見ていた児童の驚きの表情が印象的であった。文化の違いを感じると貴重な学びになったと考えられる。
- ⑥オーストラリア側の児童が、教育用デジタルコンテンツを用いて手遊び歌“ Baby Shark ”の日本語バージョンを披露した。日本側の児童にも馴染みの手遊び歌であったので、一緒に口ずさみながら参加する者もいた。

- ⑦お互い、児童全員が映って、さよならの挨拶を元気に行って第1回の国際交流活動が終了した。

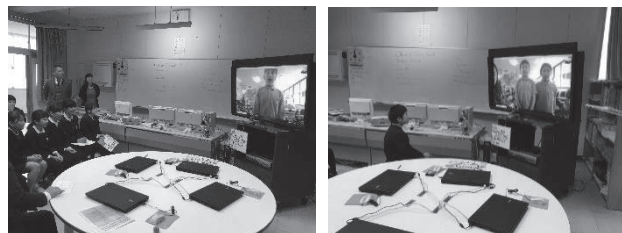


写真 1.2 国際交流活動実施中の様子  
(2018年11月26日)

## 8. 国際交流活動内容に至るまでの計画

国際交流活動の本番に至るまでの日本側の計画は、以下の順序であった。

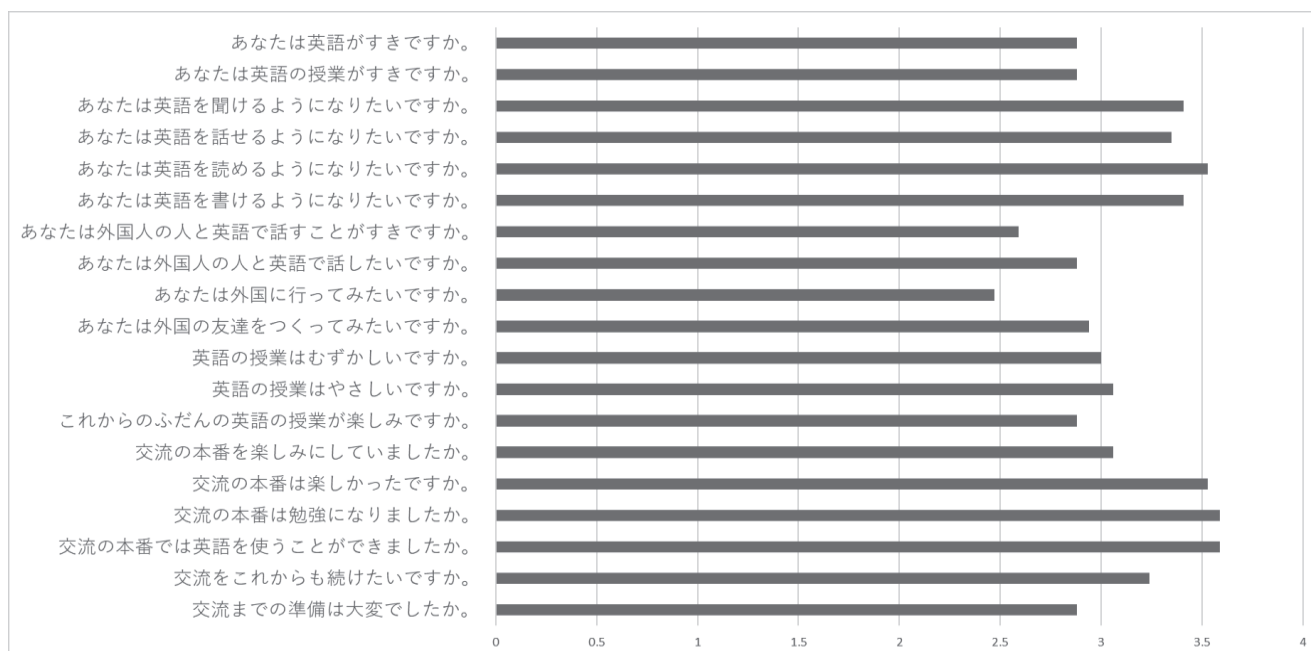
- ①国際交流活動の概要を児童に知らせ、ビクトリア州立 B 小学校について事前に理解を深める。
- ②自己紹介に必要な英語の表現について学習する。
- ③自己紹介に使う自己紹介ポスターを作成する。
- ④ペアになって英語での自己紹介の練習をする。その後、担任や校長、筆者に対して英語での自己紹介をする。
- ⑤筆者と Skype を使って英語での自己紹介のシミュレーションをする。
- ⑥英語での質問や組体操の発表の練習をする。
- ⑦筆者と Skype を使って英語での質問や組体操の発表のシミュレーションをする。
- ⑧国際交流活動の本番を行う。

## 9. A 小学校の児童と教員における事後アンケート

今後の改善に繋げるために児童と教員の事後アンケートを行った。児童に対して行ったアンケートは、19項目の4段階尺度記入と自由記述を質問紙形式で回答させた。

児童の19項目の4段階尺度評価の平均を示した結果が、表1である。この結果から国際交流活動を進めていく上で貴重な情報を読み取ることができる。

第1に、英語や英語の授業が好きかを問う質問や、楽しさを問う質問に対して平均値が肯定的評価値の3以下であった。英語嫌いの児童が一定数存在することを指導者は認識する必要がある。その児童に対しては、カウンセリング的な時間を取って、理由の把握、不安や苦手意識の軽減ができるような



4: とてもそう思う 3: そう思う 2: そう思わない 1: 全く思わない n = 19の平均値 (2018年12月)

表1 児童の国際交流活動のアンケート結果

手立てが今後、必要である。

第2に、英語の聞く、読む、話す、書くの4技能向上への向上意欲は、ほとんどの児童が高い意欲を有していることが数値から判断できる。今後も、国際交流活動が続ける中で、英語を実際に使ってみて、通じる喜びや満足感が得られる場面を創り出すことができれば、4技能向上への意欲は減ずることはないと推察できる。

第3に、国際交流本番での楽しさ、勉強になったか、英語を使うことができたか、今後も続けたいかの質問に対して肯定的意見が多かったことは、本交流活動が成功したと言ってよいであろう。

第4に、外国人と英語で話したい、友達になりたい、外国に行ってみたいに対する項目は、低い者もいるので、今後も継続的に国際交流を続けていく中で、肯定的な意見が多くなるように期待したい。

第5に、今後の普段の英語授業の楽しみについての評価でさらに肯定的意見が増えるようにする工夫をしていかなければならない。例えば、国際交流活動のために特別な英語学習の設定をするのではなく、普段の授業に国際交流活動で必要となる英語の語彙や表現を意識づけて計画的に学んでおけば、児童はその有効性に気が付き、肯定的な意見が増えるであろう。今回は、事前に年間計画に組み入れていた

のではなく投げ入的に国際交流活動を計画したので、普段の英語の授業とは関連が少なかったことは否めない。

児童の自由記述では、表2で示すように今回の国際交流活動を肯定的に捉えている意見ばかりであった。この結果からも本交流活動が成功したことが伺える。特に、緊張はしたが、それ以上に楽しさや勉強に繋がったことに満足感を感じていることが分かる。

始めは緊張したが、結構、話をするのも慣れた。  
初めての交流で緊張したが、意外とできてよかった。  
緊張した。だけど楽しかった。  
初めてで緊張した。  
緊張したけれど間違えずに言えたらいいと思う。  
緊張したけれど楽しかった。  
B小学校とスカイプで交流したのが楽しかった。  
外国の子と交流できて楽しかった。  
相手の学校と交流ができてとても楽しかった。  
もっとたくさんの外国の子と交流したい。  
交流の準備はとても大変だったが、できてよかった。  
本番はすごく緊張していたけれど、交流してとても勉強になった。  
すごく緊張したけれど、やってみたら楽しかった。これからはしたい。  
すごく楽しかった。オーストラリアとの交流だから緊張した。  
はきはきと言わないといけないと思った。  
しゃべれるようになったからかっこいいと思った。  
B小学校の子は日本語がとても上手で私もやりやすかった。  
英語がきちんと話せているか全然分からなくて緊張しました。

表2 児童の国際交流事後アンケート自由記述

教員へのアンケートでは、5項目の記述アンケートを実施した。実際の項目と記述内容を次に示す。

①「今回の国際交流活動で児童にとって良かったこと。」

相手に伝えることを意識して英語を勉強できたことがよかった。また、交流を楽しみにして期待をふくらませたり、良い緊張をもって学習できたりしたのがよかった。筆者がゲストティーチャーとして一部、授業をしたのが助かった。

②「今回の国際交流活動で大変だったこと。」

交流の進行を担当したので緊張した。事前に交流の内容を把握し、英語で言えるように準備していたが、計画にない場面等で臨機応変に対応できるか不安であった。また、正しく伝わるかも不安であった。

③「国際交流活動が続ける時、どのような支援が必要か。」

交流の進行に関連する英語の表現を今回のように事前に教えてもらうなどの支援が欲しい。進行の直接の支援も欲しい。

④「国際交流活動が続ける時、教員はどのような準備が必要か。」

自身で交流校の教員と話し合えることや、授業で使っている教材をいかに交流に繋げていくかが大切である。交流校の教員とねらいや進行の詳細について十分に話し合っておけるとさらに良いと思った。

⑤「今回の一連のプロジェクトを通じた感想。」

子どもたちにとっても、教員にとっても貴重な体験となりすごくよかった。小学校で外国語が教科となっていく中で、それを教えていく自分もさらに勉強していかなければならないと感じた。

この教員にとって、初めての国際交流活動を経験し、その意義を見出し、質の高い英語教育への発展性を感じ取ることができたと推察できる。また、教科化に向けて教員自身の学びをしていかなければならないという意識変革になったと考えられる。

## 10. A 小学校で実施された支援

本国際交流活動で筆者が専門的な立場から行った支援は、「対面授業の支援」「Skype を使ったのシミュレーション授業支援」「オーストラリア側の日本語専科教員との事前打ち合わせ及び調整の支援」の3つに分類できる。

これから順に具体的な支援内容を示し、支援を行った側の省察を述べる。

### ①「対面授業の支援」

国際交流活動を経験していない小学校教員にとって、どのような事前の授業を行っていけばよいのか理解するために指導の実際を見て学ぶことが重要である。

今回、筆者がゲストティーチャーとして児童と対面し授業を行ったのは計3回であった。

1回目は、国際交流活動の概要を知らせ、ビクトリア州立 B 小学校について事前に理解することをめあてとした。総合的な学習の時間を使った。Google Earth を電子黒板で提示し、A 小学校全景を映し出し、そこから B 小学校へ移動する様子を児童に見せた。Google Earth は空間移動を ICT でバーチャルに経験できる優れた無料ソフトである。児童の意識を集中させてオーストラリアへ誘うことができた。

次に、筆者が2018年8月に B 小学校を訪問した際に撮影した写真を提示して学校の様子を観察させた。観察する際、児童に自分たちの小学校との共通点と相違点を見つけるように指示した。児童は制服やパソコンがあることなど共通点として見つけることができていた。相違点としては、様々な人種の児童がいることやスクールバスがあることなどを挙げていた。

最後に B 小学校のホームページを見ながら、外国語として日本語を学んでいることや他のどのような学びや活動をしているかを提示し理解を深めた。

このように国際交流活動の相手校の背景を知ることは、コミュニケーションを取る上で重要である。これは、新小学校新学習指導要領外国語科の目標になっている「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」に繋がるものである。

2回目は、自己紹介で必要となる英語の語彙や表現について活動を通して学ぶ授業を行った。最初に国際交流活動で自己紹介をするために必要な英語の語彙や表現を学ぶというめあてを示した。その後、教員のデモンストレーションで挨拶の言葉、名前を伝える表現、自分の好きな動物をいう表現を紹介し到達目標を示した。次に、絵カードを使って動物名に慣れ親しむ活動を行い、最後に自分の好きな動物を選択し、友達同士で自己紹介をする場面をつくった。担任の先生には、本時を参考にして児童の好きな動物、食べ物、スポーツ、教科など英語で伝えることができるようにするための本時に続く授業を実施するようにお願いした。

担任による授業を経て児童が一通りの英語による自己紹介

ができるようになった段階で筆者が 3 回目の授業を行った。最初に児童は、ペアになって英語での自己紹介の練習をした。その後、クラスの児童全員の前で発表し、最後に担任や校長、筆者に対して英語での自己紹介をし練習の機会を増やした。

児童が国際交流活動の時にスムーズに自己紹介をできるようにするためには、練習の機会を多様なパターンで作り出し、緊張感への抵抗力と自信をつけさせることが肝要である。これまでの取組のように個人からペア、小グループや全体へと難度を少しずつ高める工夫が有効である。

### ②「Skype を使ったシミュレーション授業支援」

Skype で国際交流活動をする場合は、その設定状況を再現してシミュレーションを試しておく、伝わりやすさが向上する。また、本番で児童の心理的負担を軽減することもできる。指導者の視点からも児童に対して適切な助言をすることができる。例えば、声量が足りない場合や視線を相手に合わせるなど細かな指導がその場でできる。

筆者がシミュレーションして行った授業は計 2 回であった。1 回目は児童個人の自己紹介をする場面である。筆者は自宅のノートパソコンで Skype を使って A 小学校と接続して B 小学校の役割を果たした。数多くの機会を作って自己紹介を練習してきたので完成度が高いことを改めて確認することができた。個人的な指導では、視線を合わせること、声量を上げること、笑顔で言うこと、英語の名詞を複数形にすることなど行った。英語の表現訂正は、強制的な指導にならないように心掛けた。例えば、“I like dog.”でも通じるが“I like dogs.”の方がより通じることを伝え、修正を促した。

2 回目は、英語での質問タイムと組体操の発表の場を筆者の自宅から Skype で接続して実施した。その際、助言を二つ行った。一つは、児童が韓国のポップミュージックが好きか英語で尋ねる場面で、オーストラリアの児童に韓国のポップミュージックを聞かせてから尋ねよう提案した。もう一つは、組体操でバックミュージックを入れて、教師の笛の合図も入れることであった。コミュニケーションを図るためには言語の力は当然必要ではあるが、非言語情報の大切さも教員や児童に認識してほしいという筆者の考えからである。

### ③「オーストラリア側の日本語教員との事前打ち合わせ及び調整の支援」

筆者の繋がりから B 小学校の校長と日本語専科教員の承諾を経て A 小学校に打診し、国際交流活動実施が決定した。そ

の後は、日本語専科教員と筆者による事前打ち合わせを電子メール及び Skype で行ってきた。日時、対象学級、内容、進行の順序について話し合ってきた。

また、両小学校間で Skype を接続したことがなかったので、10 月に筆者と日本語専科教員のみで試した。音声と画像とも良好であることを確認した。念のため国際交流活動当日の 2 時間前にも最終接続テストをして問題がないことを確認した。

今までの経験から接続できなかつたり、音声や画像が使えなかつたりすることがあったので接続テストは複数回行うことが大事であることが分かっていた。

今回は両小学校での初めての国際交流活動であったため筆者が全ての事前打ち合わせ及び調整を担ってきた。今後は、A 小学校の教員がその役割を果たしていくことが重要である。筆者は英語で意思疎通を図ってきたが、日本語専科教員であるため日本語も使用できる。したがって、日本の小学校教員にとって日本語を使って事前打ち合わせ及び調整ができることは国際交流活動の実施面で大きな助けになることは確かである。この点にもオーストラリアの小学校を相手校にする利点が存在する。

## 1.1. 考察

新学習指導要領外国語科の目標であるコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成するためには、児童が主体的にコミュニケーションを取ろうとする必然的な場面を組み込んでいく工夫が必要不可欠である。国際交流活動は、その工夫に十分値する教育活動である。

児童のアンケート結果から先行研究が明らかにしてきたことと同様に国際交流活動で、英語を使う必然性を高めたため児童の学習意欲の高まりを本事例でも確認することができた。国際交流活動を経験した教員も児童の変容を目の当たりにし、質の高い英語教育への可能性を感じたことも確かである。

英語教育や国際交流活動の専門的な理論や教育方法を知る者からの支援で、国際交流活動を導入することが可能であることを示せたことは本研究の大きな成果である。

国際交流活動を経験したことのない小学校に対しては、モデルを示すための出前授業を行う支援が有効である。児童が国際交流活動で使用する英語の語彙や表現をゲームやチャット、スキット、ペアやグループ活動等で学習していくことを教員は観察する中で学んでいく。また、事前打ち合わせ及び調整の支援も有効であった。小学校教員がこの事前打ち合わ



せ及び調整を自力で行えるように支援していくことが次への課題である。

Skype を用いた国際交流活動では、本番までにシミュレーションを持つことが重要な支援となる。このシミュレーションによって児童の練習機会が増える。また、適切な助言を行うことで児童も教師も安心して本番を迎えることができる。

残念ながら本研究で協力してくれた小学校が今後も国際交流活動を続けていくためには、専門的な者からの継続的な支援が必要である。小学校英語教育の理論や教育方法を学んでいない教員が大多数を占める現状では無理もないことである。しかしながら、筆者は小学校新学習指導要領外国語科の目標に合致する国際交流活動のモデル的な内容を整備し、専門的な支援を得ることができれば、今まで導入していなかった小学校も継続的に取り組むことが可能であると考えている。

また、文部科学省は小学校新学習指導要領外国語科における評価についてまだ、明確に公表してはいない。指導と評価を一体化して教育の向上に結び付けていくことは、もはや定石である。したがって、英語教育と国際交流活動における評価についてもしっかりと考えていかなければならない。

最後に、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することが目標ではあるが、国際交流活動は、さらに上位の目標をも含んでいる。小学生のころから海外の同年代の子ども同士がお互いを伝え合いより知ろうとする経験は地球市民への第一歩である。保護主義的な風潮が全世界的に侵食する中、国際交流活動を通して多文化共生社会を実感し世界の平和に結びつくことを願っている。

## 引用文献

石毛 佐和子 (2018) 「外国語活動におけるコミュニケーション能力育成と評価のための ICT による授業改善」  
(<https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-16H00090/16H000902016jisseki/>)  
科学研究費助成事業データベース

富島 純子 (2016) 「小学校外国語活動における児童のスライドショー制作を取り入れた持続的な海外交流実践」  
(<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-26910012/>)  
科学研究費助成事業データベース

辻伸幸 (2009a) 「英語嫌いを生み出さないためには」  
河原俊昭編著 『小学生に英語を教えるとは — アジアと日本の教育現場から —』 pp.65～80  
めこん

辻伸幸 (2009b) 「国際交流活動と英語活動の関連した学びでの子ども変容」 『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』 第 32 集 pp.92～95

辻伸幸 (2009c) 「国際交流活動を通じた言語や文化の体験的理解に挑戦」 影浦攻・小学校英語セミナー委員会編 『小学校英語セミナーNo34』  
明治図書 pp.24～27

辻伸幸 (2009d) 「スカイ小学校との国際交流実践 3 年生・外国語活動」 和歌山大学教育学部附属小学校編 『質の高い学びを創る授業改革への挑戦 — 新学習指導要領を越えて —』 pp.149～157  
東洋館出版社

辻伸幸 (2011) 「国際交流活動の英語学習経験者に対する追跡調査及びプロジェクト型英語活動の開発」  
(<https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-20903005/209030052008jisseki/>)  
科学研究費助成事業データベース

辻伸幸 (2016) 「文部科学省外国語活動教材と国際交流活動をリンクした学習による語彙と表現の定着」  
(<https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-15H00016/15H000162015jisseki/>)  
科学研究費助成事業データベース

米田佐紀子、西村洋一、宮浦国江 (2018) 「小学生の英語運用能力向上のための教育プログラム構築への研究」  
(<https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-15K02803/15K028032017jisseki/>)  
科学研究費助成事業データベース

## 謝辞

本研究の実施にあたり快く協力していただきました紀の川市とビクトリア州の小学校の校長先生はじめ、先生方に心より感謝の意を表します。研究結果を踏まえ、今後の小学校英語教育と国際交流活動の充実に努めていく所存でございます。